『スーラ』（1973）における黒人共同体と
パーリアとしてのスーラ

渡　部　知　美

2021年３月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編　島大言語文化　第50号　抜刷

島根大学法文学部

『スーラ』（1973）における黒人共同体とパーリアとしてのスーラ

渡　部　知　美

はじめに

トニ・モリスン（Toni Morrison）の第２作『スーラ』（*Sula*, 1973）は，ブラック・ナショナリストやブラック・パンサーと呼ばれる黒人の過激派組織による人種統合のための熱い運動が行われた1960年代後半という時代背景の中で書かれている。本作品は, 1919年から65年までの，オハイオ州の架空の町メダリオン（Medallion）の黒人が住む丘の上の集落ボトム（the Bottom）が舞台となっている。ボトムについてロベルタ・ルーベンスタイン（Roberta Rubenstein）は，“It is the community of Medallion as much as Sula who is the central ‘character’ of *Sula*”（Rubenstein 149）と述べている。また，モリスンは黒人共同体について次のように語っている。

> The civilization of black people that lives apart from but in juxtaposition to other civilization is a pariah relationship. In fact, the concept of the black in this country is almost always one of the pariah. But a community contains pariahs within it that are very useful for the conscience of that community. (*Conversation with Toni Morrison* 168)

黒人共同体はアメリカ社会においてパーリアであるが，さらにその中に共同体の良心のために役立つパーリアが存在していることを述べている。

本作品は元々1919年のシャドラック（Shadrack）の章から始まっていたことをモリスンは明かしている（*Conversation with Toni Morrison* 83）。その章の前，作品冒頭に置かれたボトムの起源神話は，どういう意味を持っているのか。本論においては，共同体としてのボトムと住民から異端視されている人々との関係，少女の時に親友になるネル・ライト（Nel Right）とスーラ・マエ・ピース（Sula Mae Peace）の関係に注意を払いながら，ボトムの崩壊の意味とパー

リアとしてのスーラについて考察をする。

1．肉体の秘める流動性（mobility）と規範の幻影性

処女作『青い眼が欲しい』（*The Bluest Eye*, 1970）において，モリスンは，白人の美的価値基準によって自分を醜いと蔑み自己否定する黒人少女ピコーラ・ブリードラヴ（Pecola Breedlove）の無意識的共犯性と，オハイオ州ロレインの同じ黒人仲間の物語消費の犠牲にされることにより，狂気に追い込まれ精神的に破滅するピコーラの物語を書いている。ピコーラは，ハンナ・アレントが『パーリアとしてのユダヤ人』（1940）で述べる，自己の他者性を受け入れられず，ヨーロッパの抑圧民族との同化を求め，自己喪失していくユダヤ人のようである。親しかった黒人少女達でさえ，ピコーラの貧しさ，孤立，精神的弱さ，近親相姦による妊娠につけ込んで自己規定し，優越感を抱いていたことを，大人になった語り手クローディア・マクティア（Claudia MacTeer）が自省的に語っている。ピコ―ラよりも少しは経済的に豊かな家庭に生まれ育ち，友達もあり，清潔でたくましく，道徳を守る健全な人間であると自己規定することは，人種差別による惨めさ，屈辱感を和らげてくれるのである。ピコ―ラという存在のおかげで，心のバランス感覚，平安を取り戻せるのである。

ピース家の三人の女達，スーラの祖母エヴァ（Eva）と母親のハナ（Hannah），スーラとボトムの人々との間にも心的距離感がある。しかしピコ―ラとは異なり，三人とも自分の生き方を自分で決め，それを貫く強さを持っている。

ピース家の創始者とも言えるエヴァはもとは「伝統的母親」“traditional mother”（Harris 73）であった。三人の子供を抱えた彼女は，生きるために自分の片足と引き換えに大金を得る。また，寒さと飢えの中で便が出ず苦しむ赤ん坊のプラム（Plum）を救いたい一心で，彼のおしりの穴にラードを塗り指で固まった便を出しさえしている。夫ボーイボーイ（BoyBoy）に捨てられたエヴァは，子供のためには自己犠牲もいとわない母性の権化であるかのようである。彼女が自分の生き方をはっきり変えるのは，ボーイボーイがやって来て子供に会いたいとも言わずに出て行き，一緒に連れてきた「黄緑色の服」（“pea-green dress”）（35）を着た女と外で笑っている「調子の高い大都会風の笑い」（“high-pitched big city-laugh”）（36）を耳にした瞬間である。自らの身体の一部

を犠牲にしてまで田舎で実直に生きてきた自分が，馬鹿にされているように思えたのではないか。自身が精神的に傷つき易いということが分かっているから，エヴァはボーイボーイへの憎しみを生きる力に変えることを決心するのである。

> Knowing that she would hate him long and well filled her with pleasant anticipation . . . . Hating BoyBoy, she could get on with it, and have the safety, the thrill, the consistency of the hatred as long as she wanted or needed it to define and strengthen her or protect her from routine vulnerabilities. . . . it was hating him that kept her alive and happy.（36-37）

こうしてエヴァは，個人的な人間関係を超越していく。宿無しとはいえ白人を，無計画に建て増しした大きな家に住まわせ養う。親による命名さえ無視して，家に入れた子供の名前を付け替えさえする。社会的習慣には無関心なのであり，エヴァはこうして絶対的権利を持つピース家の統括者になっていく。ピース家に住む人々の父親であるかのような大きな力を持ち，カリスマ性さえ帯びた存在となるのである。しかし，彼女は日々訪ねてくる紳士客を意識して，一本しかない脚にストッキングと足首のずっと上までくる「黒い編み上げ靴」（“black laced-up shoe”）（31）を履いている。彼女は女であることを忘れてはいないのである。エヴァのこの女としての部分がボトムの人々が彼女の生を理解する糸口にもなっていると捉えられる。

ハナはボトムの身持ちの堅い女達（“good women”）（44）からは「みだらな女」（“nasty woman”）（44），性的にだらしない女と見られている。「性の小波で震えている」（“rippled with sex”）（42）と表現されたハナの体は，男性の体との触れ合いを欲しているのである。その欲求に従い，妻子ある男性であろうと，日々，男との昼の一時から性の喜びを享受している。しかし，ハナは「決定的な深入り」（“a definite commitment”）（44）は拒む。一方，ボトムの男達はハナの性的魅力にとろけてしまい，彼女を「気前のいい女」（“generous woman”）（44）と捉え，自分の妻の彼女への非難からハナを守ろうとさえする。女達も自身の中に，ハナのように行動したいという欲求，魅力的な男となら性的関係を持ちたいという思いがあるのを，密かに認めているのである。また，ハナは老いたエヴァや幼いスーラの世話を毎日している。従って，彼女は

ボトムの人々の規範の許容範囲内に位置しているのである。女達も自分の夫が彼女の遊び相手として選ばれたということでむしろ，自分の夫の男性としての魅力と価値を再認識しているかのようである。ハナはボトムの伝統的保守的女の生き方から完全に逸脱してはいないのである。

ネルの母エレーン・ライト（Helene Right）は，妻として母として規範に則った生き方をしていると見えながら，自身の中で逸脱の欲望が噴出するのを畏れている。エレーンの祖母セシル・サバ（Cecil Sabat）は，エレーンの母で娼婦をしているクリオール人のロッシェル（Rochelle）の性的にみだらな血が現れないように，[1] エレーンを四体のマリア像が見守る中で育てた。結婚後は，エレーンは煉瓦が敷き詰められたポーチ，窓には本物のレースのカーテンを掛けた家で，良妻賢母に修まっている。家の中を整理整頓し，豊かな髪を一つに束ねて丸め，ネルが作る友達や他人の行儀作法にさえ関心の目を光らせている。保守的な黒人教会に属し，祭壇に季節の花を供えたり，第一次世界大戦からの黒人退役軍人に歓迎の宴を催す習慣を導入したのもエレーンである。彼女は，「自分の権威はあくまで正しいという確信を抱いて，堂々とあらゆる社交上の戦いを勝ち抜いてきた女」（“A woman who won all social battles with presence and a conviction of the legitimacy of her authority”）（18）であり，自身の道徳的堅固さに自信を持っている。しかし，ニューオーリンズの病の床に伏しているセシルを見舞うことを決意したエレーンは，「重苦しい不安」（“heavy misgiving”）（19）を覚え，自分には身についた「礼儀作法と態度」（“her manner and her bearing”）（19）という「もっとも自分をよく守ってくれるもの」（“the best protection”）（19）があるが，さらに「ベルベットの襟とポケットがついた，重々しい感じはするものの優雅な服」（“a heavy but elegant dress with velvet collar and pockets”）（19）を加えようと決める。自己防御をしなければならないという点に，エレーン自身も，性的にみだらな血を引いていてそれがいつ現れるかもしれないという不安を抱いていることが分かる。南部へ向かう列車に乗ったばかりなのに白人用車両にいることを車掌からとがめられ，世間からは黒人と見なされていることを思い知らされる。エレーンは思わず，まぶしい程媚びるように微笑んでしまう。白人の血も引き美貌のエレーンは自分の容貌に自信があるのだと思われる。この瞬間のエレーンは，“she feels herself losing her place as Helen Wright and slipping into an identity with her mother, the whore”（153）と表現されている。自分の中に閉じ込めていた母ロッシェルの血を確認するよ

うな思いだったと感じられる。

一方ネルは，母が白人男性の前で一瞬にしてカスタードのようにとろけるのを目撃してしまう。それはネルにとって，服の下のカスタード色の肌をさらけ出すに等しい行為であり，ネルは母が女になった瞬間の“the grotesque formlessness of the body”（Dubey 65）を一瞬だけれど垣間見たのである。そして自身も母のようになってしまわないかと怯えている。Madhu Dubeyは，この不安故に成長したネルは家父長制社会における女の保守的生き方，良き妻，良き母という“stable identity”（Dubey 65）の中で安住することを選ぶのだと指摘している。ハナやエレーンだけでなく，ネルの身体も流動性を秘めているのである：「もし彼女が本当はカスタードだったとすれば，ネルもまたカスタードにすぎない可能性があった」（“If she were really custard, then there was a chance that Nel was too.”（22）。この不安は，父親チョリー（Cholly）にレイプされ子供のできたピコ―ラの自己否定を強め，自己が無いという状態に彼女を追いやり，破滅への道を急がせた要因の一つでもある。黒人の血を性的だらしなさと結びつけ，自身の中の他者性に怯え,それを押さえ込む努力をし続けて共同体の中心に，昼間の世界に身を置いて生きているのがエレーンであると捉えられる。規範側にあるとされる人間の弱さ，規範の幻影性を物語っているかのようである。

2．ボトムに脅威を与えるスーラ

鏡に映った自分を見てネルが言う言葉,「わたしはわたしなんだわ。わたしはあの人たちの娘じゃない。わたしはネルじゃない。わたしはわたしよ。わたしなのよ」（“I’m me. I’m not their daughter. I’m not Nel. I’m me. Me.”）（28）は，彼女の内的変化を物語っている。黒人であり，女であることの限界をネルは悟ったのである。そのうえで自分は白人男性に媚びるような女にはなりたくないと思っているのである。遠くへの一人旅を想像したり母の言葉に逆らってスーラと友達になるのは，自分の限界を超えようという気持ちがネルの中で働いているからである。自分は自分であり自分の行動は自分で決めるのだと思っている。ピコ―ラのように黒人の女の子としての自分を否定するのではなく，自分の中に「新しく発見した私というもの」（“her new found me-ness”）（29）を感じるが故に自身に力を感じ，この新たな自分として生きるのだと自身に宣

言をしているのである。

一方，スーラは，「スーラを愛してはいるけれど，好きではない」（“I love Sula. I just don’t like her”）（57）という母ハナの言葉に傷つく。母親がどういうものかをエレーンとネル親子を見て分かったからだと思われる。幼い黒人少年のチキン・リトル（Chicken Little）の手を持って思い切り振り回していたために，チキンは川の水に吸い込まれ死んでしまう。母の言葉を振り払いたい，母親に好かれていない自分を消してしまいたいという気持ちが働いていたと捉えられる。死は偶然ではなく故意の技，即ち，神のなせる業と考えるボトムの人々は，チキンの死の原因を究明せず，スーラは責任を追及されることはなかった。だがそれ故になおさら，手のひらに残った指の感触を通して，小さな命の重み，良心の呵責をスーラはずっと感じて生きていくのだと捉えられる。しかし，告白する勇気も無く，自分さえあてにならないという思い，母親にとって自分が意味のない存在だという思いが，少女のスーラを“emotional orphan”（Rubenstein 132）にしていく。

ルーベンスタインは“At the core of her personality, where the patterns of self-confirmation and ethical sense should develop, is a void”（Rubenstein 132）と指摘している。ピコーラのように自己が無く，情緒的に不安定な状態にスーラは落ち込んでいる。ボトムの外の世界でスーラが一番に求めたのは，ネルとの間にあった親密感の抱ける人，心の絆が結べる人だったと思われる。だから，自分の体を実験台にして次々と男と性的関係を持ったのである。男は「同志」（“comrade”）（121）にはなりえないということが分かっただけでも彼女の実験的生は，意義あるものだったと言える。従って，彼女は自分の中の空白を必死に埋めようとしているのだと捉えられる。大学教育を受けるのもそういう気持ちが働いていたからである。ボトムに戻ったスーラは，情緒的にも安定し，物事を観察することのできる女性に変貌している。結婚を拒否し，「わたし，ほかの人間なんて誰も作りたかないよ。自分だけを作りたいんだから」（“I don’t want to make somebody else. I want to make myself ”）（92）とエヴァにきっぱり言うスーラは，自身の限界を超えたレベルで生きることを模索したいのである。スーラは女の伝統的保守的生き方を拒否している。元々母権的である黒人共同体が，白人の考え方，価値観を信奉していると捉えられる。エヴァや夫と死別したハナは，妻としてジェンダー役割を果たす機会を奪われたのであるが，スーラは自らその機会を放棄する。そういう生活の中で自分というものが

埋没し失われるのを危惧するのである。また，スーラは黒人の道徳的規範に反すると承知していても，エヴァを老人ホームに入れる。[2] 共同体の伝統よりも一人の人間としての自分という個人の方を尊重するのである。病床に伏しているスーラを見舞って帰ろうとするネルに，スーラが発する言葉“About who was good? How do you know it was you?”（146），“I mean maybe it wasn't you. Maybe it was me.”（146）には，「自らの感情や本能に忠実に生きた自分の方にこそ「正義」があるのではないか」（宮津158）というスーラの気持ちが感じられる。スーラは自らの他者性を肯定しながら，共同体の規範に批判の目を向け，自分に人間としての尊厳さえ抱いていると捉えられる。彼女の「時間はかかるけど，みんなわたしを愛するようになるわ」（“It will take time, but they'll love me”）（145）という言葉は，自身の生き方を彼女が肯定していることを伝える。

スーラはピース家の血を引き，社会的慣習を無視し誰とでも性的関係を持つ自由奔放な女であるとボトムの人々は捉えていると思われる。しかし，スーラがボトムの人々から悪魔扱いされることになった決定的原因は，彼女が白人男性と寝ているという噂である。奴隷制時代から，多くの黒人女性が白人男性にレイプされてきたのであり，彼女の行為は恥辱を味わった黒人の歴史への侮辱を意味している。[3] ボトムの住民にとっては，黒人共同体，先祖との決別と思えるのである。自らの意志で白人男性と寝るというスーラの身体のありように，人々は驚き，あきれるのである。変化を好み，自分の生き方を積極的に考え，模索するスーラにとっては，人種とジェンダーの境界は揺らぎ，曖昧になるのである。人種とジェンダーの境界をたやすく越えるスーラは， 自分達の存在基盤であるボトムという安定感のある小宇宙，“a life-sustaining structure”（Rubenstein148）を脅かす存在と住民には思えるのである。

> She is perceived as far more dangerous than someone like Shadrack because she actively threatens the defenses against moral and social transgression that lie hidden in the souls of most people. (Rubenstein 149)

ボトムの住民は規範の側に身を置いて，スーラの振る舞いや行動を監視し敏感に反応するようになる。自分達の住む小さいけれど心地の良い世界に彼女が与える脅威が，パーリアとしてのスーラを決定づけるのだと考えられる。

3．ボトムの住民にとってのスーラ

ボトムの起源神話には，先祖から受けついだ，人種差別の中で生き延びるための生き方が織り込まれている。白人農夫が黒人奴隷に，難しい仕事をやり終えたら自由の身分にし,「最低部の土地を少しばかり」(“a piece of bottom land”)（5）与えると約束した。しかし，奴隷を自由にはしたが，肥沃な谷間の土地を与えるのが惜しくなり，農夫は丘の上の土地を「天の最低部」(“the bottom of heaven”)（5）だと言いくるめて黒人に与えた。農地には適さず，冬には風が強く吹き，貧しさを強いられる土地である。白人の狡猾さ，だまされる自分達黒人の無垢，愚かさを「クロンボーのジョーク」(“nigger joke”)（4）にして，目に涙を浮かべて笑いながら,「大人の心の痛み」(“adult pain”)（4）に耐えながらボトムの黒人達は生きてきたのである。こうして白人が丘の上に住み，黒人が低地に住むという通常のあり方とは逆転した世界が生まれたのである。

ボトムの黒人達のこの悪と共存しようとする生き方には，彼等の悪と神についての考え方が関わっている。

> In their world, aberrations were as much a part of nature as grace. It was not for them to expel or annihilate it. They would no more run Sula out of town than they would kill the robins that brought her back. For in their secret awareness of Him, He was not the God of three faces that they sang. They knew quite well that He had four, and that the forth explained Sula. (118)

共同体の規範からの逸脱は，コマドリの大群の襲来のような自然現象，自然災害と同様に捉えられている。また，彼等によって神が持っていると考えられている四つ目の顔については，次のように説明されている

> In Morrison’s fictional world, God’s characteristics are not limited to those represented by the traditional Western notion of the Trinity: Father, Son, and Holy Ghost. Instead, God possesses a forth face, one that is an explanation for all those things—the existence of evil, the suffering of the innocent and the just—that seems inexplicable in the face of a religious [Christian] tradition that preaches the

omnipotence of a benevolent God. (Jennings 26)

神の四番目の顔とは,「悪の存在」と「無垢な者や正しい者の苦しみ」を認める顔と考えられる。従って，四つの顔を持つ神を信奉するボトムの人々は，理不尽なやり方を通す白人も悪魔のようなスーラの存在も認めた上で，それらから生き延びようと努めるのである:「悪の存在は，最初にそれを認めて，対処し，それから生き残り，裏をかき，打ち負かすものだった」(“The presence of evil was something to be first recognized, then dealt with, survived, outwitted, triumphed over.”)（118)。悪に対するこの穏健な態度故に人々はスーラを反面教師とし，日頃の自分達の行いを改め，自分の家族にも思いやりを示すようになるのである。ルーベンスタインは“Like Pecola Breedlove, Sula provides a negative energy against which members of the community test their own values, a screen upon which they project their needs and fears”（Rubenstein 149）と指摘している。スーラは，人々が自己規定をし善行をするのに役立っているのである。住民達は自身の中にも，共同体の規範からの逸脱への性向や欲望があることを認めているのである。スーラは「人々の隠れた本能や欲望を映し出す鏡」（宮津182）でもある。

スーラの死は，人々の心のタガを緩めてしまう。悪の消滅に歓喜して, 1941年の 1 月 3 日を最後の「全国自殺記念日」（National Suicide Day）にしようと決めていたシャドラックに，初めて多くの人々がついて行進する。第一次世界大戦に参戦した彼は， シェルショックで記憶を失ったままアメリカへ帰還している。彼が「一生なおらないほどの驚きとショックを受けた」(“Blasted and permanently astonished”)（ 7 ）のは， フランスの戦場での次の光景である。

Before he could register shock, the rest of the soldier’s head disappeared under the inverted soup bowl of his helmet. But stubbornly, taking no direction from the brain, the body of the headless soldier ran on, with energy and grace, ignoring altogether the drip and slide of brain tissue down its back. (8)

頭が吹き飛ばされても体が走っているという異様な光景が，シャドラックの記憶を一瞬にして奪ったのである。自分が誰であるのかさえ分からず自己の無い状態から，彼もアイデンティティ構築をしていく。トイレの便器にたまった水

に映った自分を見て黒人と分かったことは，彼には救いであった。しかし，死がいつ襲ってくるかわからないという戦場で経験した恐怖感は消えない。記念日を作ったのは, 1 年に 1 日だけ死に向き合う日を作れば残りの日々は安心して暮らせるだろうと思ったからである。現実から麻薬に逃避したプラムとは異なって,[4] 自分の生に秩序をもたらし，精神的に自立して生きていきたいという熱い思いをシャドラックは持っている。全国自殺記念日は，死を身近なものとして捉えているボトムの人々にも自然に受け入れられていく。現代の非情な状況を生き延びる方法をシャドラックは考えついたと言える。[5] ボトムと対岸の町とを繋ぐためのトンネル工事で黒人労働者を雇うということが, 1937年に発表という形で約束された。10年前にも同様の希望を黒人に抱かせたが，今回のも 3 年間果たされないままで「若葉のうちに枯れてしまった約束」（“dead-leaf promise”）（162）である。二項対立的考え方に陥り，白人の作ったものは地表からぬぐい去りたいという思いに駆られて，シャドラックの行進について行った黒人達はトンネルを破壊しようとする。暖かくなって緩んだ土が崩れ，溶けた雪が水となって流れ込み，多くの黒人が水死する。ボトムには，若者や少年少女の生が息づいていたという雰囲気はもはやない。

自分達が悪と捉えるスーラという存在がいたからこそ，ボトムの人々は悪に耐えて生き抜こう，悪に負けまいと努めたのである。彼等の根気強さが人々の心と生に秩序感を生み出し，共同体としてのボトムに一帯感をもたらしていたと考えられる。自分の中の悪い面を映し出す彼女という存在のおかげで，人々は自分を絶対的善人だと主張することもなかったのである。自分は天から与えられた土地を間借りしているだけの小さな存在に過ぎないという謙虚な気持ちで悪と共存して来たから，たとえ天の最低部であれ，天国のような世界が存在し得たのである。スーラは，教会の信者として共同体の精神生活の中心に位置して人々を導いたエレーンの言わば陰画である。従って，彼女は宮津多美子氏が指摘するように，逆説的な意味で共同体の中心に位置し，人々にとって精神的支柱として機能しているのである。ここにパーリアとしてのスーラを認めることができる。孤立しているスーラを，彼女の内面に目を向け理解しようとする者はいない。それぞれが外面から彼女を捉えるのみである。従って，スーラは人との外面的な関係においてのみ存在し得る人物であると捉えられる。Philip Pageは次のように指摘している。

> She can exist in the eyes of others, only as the nonprivileged member of another destructive opposition, but she cannot conform because that would eliminate her visibility and hence her existence. Unlike Pecola, who becomes what she perceives Sula becomes what she is perceived to be. Thus, her birthmark continually changes shape and color, because, like Sula herself, her mark is what others see it to be. (Page 74)

スーラの片方のまぶたにある痣のおかげで，彼女の顔に「あやしげな刺激」(“a broken excitement)（52）が生まれ,「剃刀で切られた男のケロイド状の傷痕のような，冷たい鋼に似た険」(“blue-blade threat like the keloid scar of the razored man”)（52）ができている。歳月とともに濃さを増すこの痣は，とげとげしく荒々しい，どこまでも自己でありたいという彼女の内面に巣くう自己主張が外面化したものであるかのようである。それは見る人により茎のついたバラにも，がらがら蛇やまむしにも，おたまじゃくしにも見える。[6] スーラの痣のこの変幻自在性は，彼女が人々にとって行為や行動という外面だけを見て判断されるパーリアでしかあり得ないということを暗示していると考えられる。

集落が無くなった後のボトムは，シャドラックが目にした，頭部の無い状態で走っている残りの不完全な身体と似ている。生き延びる方策を理性を働かせて考える頭を失い，今は単なる土地でしかない。しかしかつては，一つのまとまりのある共同体としてその生が胎動していたのである。

> In *Sula*, the community of the Bottom, in a northern Ohio town called Medallion, is not only a place but a presence—a kind of collective conscience that arbitrates the social and moral norms of its members. (Rubenstein 148)

共同墓地のファーストネームの彫られていないプラム，ハナ，スーラの墓石には，それぞれの生年と没年と“PEACE”という文字が彫られているのみである。彼等は程度の差こそあれ他者扱いされた存在であり，彼等がいたからこそボトムは，牧歌的な安らぎのある空間でもあり得たのである。その平穏さのかすかな記憶が，シェルショックで自制心，判断力，ほとんどの記憶を失っていたシャドラックの心に空間を生み出し，ボトムへ連れ戻してくれたのである。墓石に彫られたPEACEという言葉は，失われた黒人集落ボトムの墓碑名でもあ

る。

ジュード・グリーン（Jude Green）と結婚した後は，妻として，母として自分の存在意義が感じられる家庭生活の中で，ネルは「地獄とは変化なんだわ」（“Hell is change”）（108）と思う保守的な主婦になっている。社会的に人々に認められているということも，彼女の失いたくない幸せの中に含まれている。しかしいつの間にかネルは，自分をジェンダー役割に押し込め，想像力の自由な働きを抑圧してしまったのである。「しっかりした灰色の網の目」（“a steady gray web”）（95）で，自分の伸びやかな心を少しずつ覆ってしまったのである。従って，ネルの結婚式の日にボトムを去り外の世界で思いのままに振る舞うスーラは，ネルの分身であると考えられる。自分自身でありたいと願うもう一人の自分を，ネルは無意識的に抑圧していたのである。ルーベンスタインは，“Nel needs Sula to act out the denied dark forces in her own being”（Rubenstein 134）と指摘している。

スーラは死の瞬間も親しかったネルのことを思っている。そして自分はトンネルの中を落下して,「水の眠り」（“sleep of water”）（149）につくのだと思っている。20年近い良心の呵責という暗いトンネルを突き抜けて，チキン・リトルを永遠の眠りにつかせた水の中へ向かっているのだと思っていると感じられる。一方，ネルは，チキン・リトルが水に呑み込まれるのをただじっと見ていたということは罪であるということを認めたことで，心に余裕ができ，自然に，亡きスーラに向かって呼びかける声が出ている。妻でも母でもなく，一人の人間としての自分の生を見つめると，スーラは孤独でも自身の生を一所懸命探求していたということが分かるのである。それはこれからのネルの生き方選択にとっての参考になるのである。ネルにとっての触媒がパーリアとしてのスーラの第三の役割である。夫を寝取られた故の憎しみを超えて，スーラの人間としての価値をネルは悟るのである。ネルは,「わたしたちは，仲のよい友だちだった・・・ああ，ああ，スーラ」（“We was girls together, . . . O Lord, Sula）（174）と号泣する。ネルは今は，スーラの生き方を自由で伸びやかな生き方として肯定的に捉えているのである。そして，自身もかつてそういう風に生きたいと願っていたことをやっと思い出し，スーラと自分は同じ思いで結ばれた親友同士だったことを噛みしめていると感じられる。この瞬間のネルと彼女にとってのスーラについて，Stephanie A. Demetrakopoulosは次のように指摘している。

> Nel is a pitiable example of unfulfilled promise. What she understands in that epiphany is the glory of feminine individuation, a statement of woman/ selfhood unfettered by male definition. All along Sula had been there for Nel as a catalyst. She was there in case Nel wanted to interact with flight or with freedom. . . . Her inward cry and its tragic echoing "girl girl girlgirlgirl" is more cry for what she has lost of self . . .（Demetrakopoulos 79)

「ただいつまでも環を描きつづける哀しみ」（"just circles and circles of sorrow"）（174）と表現されたネルの哀しみは，生きている限り，彼女はスーラを思い続けるだろうと感じさせる。異端視されたスーラを親友だったネルだけは，彼女の内面に思いを馳せ正しく理解するのである。

おわりに

モリスンは本作品の構造に関し，"*Sula* is more spiral than circular"（*Conversation with Toni Morrison* 163）と語っている。シャデラックが「ずっーと」（"Always"）（62）とスーラに言った意味が後になって明かされたり，夫に去られたエヴァの気持ちが，後にジュードに去られたネルによって詳しく語られることで推測されるなど，同じ地点には戻らないが，前に語られていたことが後になってより意味が鮮明になっている。Dubeyは次のように語っている。

> . . . the circular movement of *Sula* is accumulative rather than exactly repetitive. The beginning and closing points of the novel's spiral do not quite overlap, thus leaving open the possibility of transformation. The novel at first offers an incomplete rendering of an event, withholding its meaning from the reader. Later chapters curve back to the earlier event, filling out its implications. (Dubey 69)

また，Denise Heinzはこの時間の流れに沿わない語り方について，"In *Sula* Morrison resists any type of structural closure that would suggest a resolution of double-consciousness"（Heinz 123）と述べている。アメリカは1776年に公布された独立宣言において，生命・平等・幸福の追求という約束手形をアメリカ市民に振り出した。しかし，黒人にはその小切手は200年近く「現金化」されな

かった。白人社会の中のパーリアである黒人共同体に，スーラという二項対立的考え方を抑制するパーリアを創造したモリスンは, 1960年代後半の黒人過激派の考え方を支持してはいないと考えられる。ボトムの起源神話の書き込みは，黒人の人々が辿った歴史の眺望を本作品に取り込む働きをしている。パーリアとしてのスーラとボトムとの関係は，起源神話の意味を遡及的に浮かび上がらせる。住民が悪と共存し耐えて生き抜くという姿勢を失ったために，ボトムという小宇宙は生命が尽きた。このことは，アメリカ社会への示唆ともなり得る。

付記　本稿は, 2016年 6 月の中・四国アメリカ文学会第45回大会（於広島経済大学立町キャンパス）での発表原稿を加筆･修正したものである。

Notes

1 娼婦ロッシェル・サバは,「カナリアの柔らかさと輝きを持った小柄な女」（“tiny woman with the softness and glare of a canary”）（25）と表現されている。クチナシの甘い香りが漂う中をカナリアのように軽やかに移動する。鳥は自由，時間，魂を象徴するが，ロッシェルは素敵な声で囀りながら伸びやかに飛び回っては，男を魅了し，性的快楽へ男を誘うカナリアのようである。ハナはロッシェルと似た面を持っていると捉えられる。

2 Wilfred D. SamuelsとClenora Hudson-Weemsは，ボトムの黒人にとって，自分の年老いた家族を老人ホームに入れることは “unpardonable sin”（Samuels 35）であると指摘している。

3 *Beloved*（1987）において，黒人奴隷セサ（Sethe）のオハイオ州への逃亡を助ける黒人スタンプ･ペイド（Stamp Paid）は，自分の妻を白人の主人の息子に望まれ仕方なく差し出す。エラ（Ella）は一年以上にわたって白人の父親と息子に監禁され，性的虐待を受ける。肌の色から白人との混血であると思われるポールD（Paul D）にはポールF，ポールAの二人の兄がいる。その名前の付け方から，彼等は母親には望まれない子供だったと推察される。

4 プラムの体に灯油をかけ火を付けて焼死させたエヴァは,「水の中はひどく冷たい。火は暖かいよ」（168）と言う。母としてエヴァは，廃人のように

なって帰還したプラムの心に火をつけ，奮い立たせたかったのではないか。古代エジプトに起こった錬金術において，火と空気は男性的元素，水と土は女性的元素と捉えられている（Demetrakopoulos 52）。

5 収容されたアメリカの病院で，シャドラックは自分の手の指が盆やベッドの上一面にジャックの豆の木のようにめちゃくちゃに広がり大きくなり始めるのを見て，叫び声を上げている。自分の意志とは関係なく，自分の身体の一部が動くことに彼は怯えているのである。それは，戦場で覚えた頭部のない身体の持つ流動性への恐怖感がトラウマになっていることを物語っている。それは，彼にとって死への恐怖感と直結しているのである。

6 スーラの痣についてPhilip Pageは，“it suggests the openness of interpretations of Sula's identity”と普通解釈されていると指摘している（Page 195）。

Works Cited and Consulted

Alexander, Allen. “The Fourth Face: The Image of God in Toni Morrison's *The Bluest Eye*.” African American Review. 32.2. (1998).

Baker, JR, Houston A. “Knowing Our Place: Psychoanalysis and *Sula*.” *Toni Morrison*. Ed. Linden Peach. New York: St Martin's P, 1998. 103-109.

Bouson, J. Brooks. “I Like My Own Dirt.” *Quiet As It's Kept*. New York: State U of New York P, 2000. 47-73.

Demetrakopoulos, Stephanie A. “*Sula* and the Primacy of Woman-to-Woman Bonds” *New Dimensions of Spirituality*. Westport, Connecticut: Greenwood P. 1987.51-68.

Dubey, Madhue. “No Bottom and No Top.” *Black Women Novelists and the Nationalist Aesthetic*. Bloomingtom and Indianapolis: Indiana UP, 1975. 57-71.

Duvall, John N. “Engendering Sexual/ Textual Identity: *Sula* and the Artistic Gaze.” *The Identifying of Toni Morrison*. New York: Palgrave, 2000. 47-69.

Furman, Jan. “Black Girlhood and Black Womanhood.” *Toni Morrison's Ficition*. Columbia: U of South Carolina P, 1996. 12-33.

Grewal, Gurleen. “Freedom's Absent Horizon: *Sula*.” *Circles of Sorrow, Lines of Struggle*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998. 42-59.

Guerrero, Ed. “Tracking ‘The Look’ in the Novels of Toni Morrison.” *Toni Morrison’s Fiction: Contemporary Criticism*. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1997. 27-41.

Harris, Trudier. “*Sula*.” *Fiction and Folklore: The Novels of Toni Morrison*. Knoxville: The U of Tennessee P. 1991. 52-84.

Heinz, Denise. “Up in the Bottom: Morrison’s Social Dialectic.” *The Dilemma of “Double-Consciousness”: Toni Morrison’s Novels*. Athens and London: The U of Georgia P. 1993. 102-148.

Holloway, Karla F. C. “Response to Sula: Acknowledgement of Womanself.” *New Dimensions of Spirituality*. Westport, Connecticut: Greenwood P. 1987. 67-81.

Jennings, La Vinia Delois. *Toni Morrison and the Idea of Africa*. Cambridge: Cambridge UP. 2008.

Koenen, Anne. “The One out of Sequence.” *Conversation with Toni Morrison*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 67-92.

Morrison, Toni. *Sula*. New York: Alfred A. Knopf. 1973.（本作品からの引用は，本文中で括弧内で頁数のみを示す）（『スーラ』大社淑子 訳　東京：早川書房, 1995年）

Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. New York: Alfred A. Knopf. 1970.

Page, Philip. “Shocked into Separateness: Unresolved Oppositions in *Sula*.” *Dangerous Freedom*. Jackson: UP of Mississippi. 1995. 60-83.

Rubenstein, Roberta. “Pariah and Community.” Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present. Eds. by Henry Louis Gates, Jr. and K.A. Appiah. New York: Amistad. 126-158.

Samuels, Wilfred D., and Clenora Hudson-Weems. “Experimental Lives: Meaning and Self in *Sula*.” Toni Morrison. New York: Twayne Publishers, 1990. 31-52.

Tate, Claudia. “Toni Morrison.” *Conversations with Toni Morrison*. Jackson: UP of Mississippi. 1994. 156-170.

アレント，ハンナ　『パーリアとしてのユダヤ人』寺島俊穂・藤原隆裕 訳　東京：未来社, 1989年。

蟹江弘子　「黒人女性のSexuality―Sula をめぐって」『南山英文学』第24号（2000年）55-68頁。

川村邦光編　『セクシュアリティの表象と身体』京都：臨川書店, 2009年。

利根川真紀 「Shadrackのシェルショック―Sula再考」『アメリカ文学研究』第38号（2001年）135-149頁。
西山恵美 「「ボトム」に生きたアメリカ黒人の死生観」『愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要』第８号（2005年） 1 -25頁。
宮津多美子 「パリアたちのパラダイス：トニ・モリソンが描く黒人女性とアメリカの歴史」『國學院大學紀要』第42巻（2004年）179-192頁。

The Community and Sula as a Pariah in *Sula* (1973)

WATANABE Tomomi

Toni Morrison sets a reversed world in her second work *Sula* (1973), where African-Americans live on a hill called the Bottom, and whites on the flatlands of the fictional city Medallion, Ohio. According to a legend handed down from their ancestors, a white farmer deceived a black slave into accepting the land instead of fertile low-lying ground, calling the windy barren hill "the bottom of the heaven." The Bottom is as much a central "character" as the black girl Sula Mae Peace. Sula is a pariah of the black community, which is itself a pariah in American society. I will consider the meaning of the legend of the reversed world and roles of Sula as a pariah.

Eva, Hannah, and Sula Peace live a marginal existence in the Bottom, reminiscent of Pecola Breedlove of Morrison's first work, *The Bluest Eye* (1970). However, the three women of the Peace family can define and develop themselves, while Pecola cannot accept her own otherness, that is to say blackness, and she loses herself. Eva and Hannah are accepted by other African-American residents, though they are not traditional mothers. On the other hand, Sula acts and behaves as she wishes. She respects herself first of all above the traditional conventions of the Bottom. She refuses to marry, while the others think that women should marry and become good wives and mothers. The African-American community is originally matriarchal, but it has been influenced by the white way of thinking. The rumor that she has sexual intercourse with white men is main reason why others regard her as a devil. The border between races is not important to her. Thus she criticizes conservative women who save their appearances before others and think light of their own desire and wishes. Sula defies such a way of living and even affirms her own way of thinking. Therefore, she is

consciously a pariah.

Sula is an alter ego of Nel Right, who wished to be herself when she was a child. Sula realizes Nel's wish to live an uninhibited life, travelling far and acting freely. The inhabitants of the Bottom can learn from Sula's example of what not to do and how not to behave. They tacitly recognize that they also want to be less inhibited. Furthermore, Sula will act as a catalyst for Nel, now that the latter comes to realize that Sula struggled to live in her loneliness and she really lived fully. Nel thinks that her life as wife and mother was only for her husband and her children, not for her. Thus Sula's way of life, her struggle, can suggest a new life to Nel.

The Bottom could be a heaven in this world, because the existence of Sula kept its African-American inhabitants from rigid binary thinking. She unconsciously contributed to bringing about a peaceful microcosm. The Bottom where the black community's highly evolved morality and spirit of endurance coexists with living through evil is thought indeed to be closer to the heaven. Only Nel gazes into Sula's soul after her death, while the other inhabitants of the Bottom only regard her as a pariah because she is a threat to the peaceful community. The story of the Bottom and Sula as a pariah can be a helpful suggestion to American society.